

聖霊降臨節第 20 主日 説教 「石地、茨の中で見たもの」要旨
牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022 年 10 月 16 日

マタイによる福音書 13 : 1-9

恵みの秋を迎えました。たわわに実った実りを目の当たりにすることは、踊り上がらんばかりの喜びを感じさせられるものでもあります。神の国の到来が収穫によく譬えられるのもそのためです。従って、この心揺さぶられ、また捕らえられる経験を通して深められ、強められるのが私たちの信仰でもあります。そして、この深められ、強められる経験を積むことこそが、御言葉が語る「分かる」、「知る」、「見る」、「聞く」ということでもあるのです。ですから、この「見て、聞いて、分かった」という、このわくわく感によって築かれたものが教会の歴史でもあるのでしょうか。

ところで、今、鉄道開業 150 周年ということで新聞テレビでも盛んに取り上げられておりますが、私たちプロテスタント教会の宣教が始まったのは、鉄道開業に遡ること 13 年、1859 年、横浜の寄留地のことであります。以来、私たちキリスト教会は、この「日本」という国で福音宣教の業に邁進してきたわけですが、私たちにとっての 150 年は、今年 150 周年を迎えた鉄道の歩みと軌を一にするものでもありました。日本の近代化に大きく寄与したのが鉄道であり、キリスト教会であるからです。ただ、私たちが 150 周年を迎えたその時と鉄道開業 150 周年を迎えたこの時とを比べますと、世間の受け止め方はいささかつかれないようにも思います。それは、私たちキリスト教会にとっての大事な節目を、世間はそれほど話題性を持って受け止めることはなかったからです。しかし、鉄道も教会も同じように、その使命に生きたのがこの 150 年でありました。そうした中で、世間は鉄道開業 150 周年を盛大に取り上げているわけではありますが、しかし、鉄道が今後の発展への期待感だけでこの節目を迎えたわけではありません。

かつての花形であった鉄道も、地方の過疎化に伴い、その役割を終えていった路線が日本各地にはいくつもあり、今は往時を偲ばせる駅舎だけが残されているだけというのが廃線後の状況です。ただ、この世のものはおしなべてすべてそうなのですが、経済性という観点からだけでなく、いずれその役割を終えるものでもあるのです。従

って、この、この世のものという視点に立って教会を見るなら、教会もまたその例外ではありません。そして、それについては聖書もまたはっきりと語ってくれていることです。なぜなら、この世のものとしてのコリントの教会も、エフェソの教会も、パウロの書簡にその名が記されている教会のほとんどがその役割を終え、この世にその姿を留めてはいないからです。ですから、そう意味で、地上での役割を終える可能性が私たちから取り除かれたわけではありません。けれども、そうした現実については、私たちは余り目にしたくはありませんし、また、考えたくもないというのが実のところでもあるのでしょうか。しかし、そうであるからといって、御言葉がその事実を伝えてくれている以上、そうした現実を無視するわけにも参りません。では、そうした現実について私たちはどのように考えればいいのか、この日のイエス様のお言葉が教えてくれているのはこの点であるように思います。

ここでイエス様は、天の御国の到来について、この種まきの譬えをもって四つのパターンを語っているのですが、先ず一つは、種を蒔くと鳥が来てそのタネを食べてしまったというものです。つまり、タネの持っている無限の可能性は、鳥の腹を満たしただけで終わったということです。二つ目は、石ころだらけの土の少ない土地に蒔かれた種についてですが、痩せた土地に種を蒔けばどうということになるかは言を俟つまでもありません。ただし、だから可能性がまったくないということではありません。端から芽が出ないのではなく、芽だけは出る、これはパレスチナ特有の気候ゆえのことだそうですが、それは、寒暖の差によって夜の間には露が降り、この僅かばかりの水分によって蒔かれた種は芽を出すには出すのだそうです。けれども、焼け付くような日にさらされたならどうなるのか、根がないために枯れてしまう、それは、誰が考えても当然のことです。そして、三つ目ですが、それは、芽が出て、ある程度の大きさまで成長したとしても、それ以上の早さで成長する茨にやがて覆われ、そのため日の光が届かず、また、茨に成長のための

養分も奪われ、やがて枯れてしまうということです。ところが、この三つのパターンと比べて、イエス様が良い土地と呼んでいるこの土地はどうなのか、根を張り、大きく成長し、たくさんの実を結ぶ、それも、100倍、60倍、30倍に実を結ぶと、非常に景気のいい話をイエス様はするのですが、それが神の国を迎えたその時の姿であるということです。

それゆえ、この譬え話を聞いて、聞いた者は何を思うのか。そこで先ず思うことは、この良い土地で大きくなりたい、あるいは、可能性が開花する良い土地になりたいということです。ですから、イエス様のこの譬え話が語るところは、神の国の到来を信じる私たちの信仰の、その可能性の大きさを物語っているということです。それゆえ、この譬え話を「可能性への信頼」というところから聞いた人は多いことと思えますし、事実、日本の近代化の過程にあつては、この譬え話の中で語られていることが聞く者を青雲の志、立身出世へと駆り立てることにまりました。教会を良い土地に譬え、多くの人が伝道の原動力としてこのイエス様のお言葉を聞いた人のはそのためです。従って、キリスト教会が日本の近代化に大きく寄与することになったのはそれゆえのことでもあります。しかし、この良い土地への期待、蒔かれた種の可能性を語るこの譬え話は、その一方では、また別の語られ方、聞かれ方、理解のされ方をされることにもりました。それは、良い土地の可能性の高さが語られるその一方で、石ころだらけの土地も、茨に覆われた土地も、可能性を摘むものとして否定的に捉えられることになったからです。

このように信仰弱き者、信仰薄き者への戒めとして、つまりは、この譬え話を教訓的に捉えられるようになったのはそのためでもあります。しかし、頑張っても頑張っても一向に芽が出ない、もしそうだとしたら、そこで何を人は思うのか。自分は良い土地か、それとも悪い土地なのか、と不安になるのはもちろんのこと、次に思うことは、だから、もっともっと頑張らなければならないということでもあるのでしょうか。ただ、そこで頑張ることのできない人はどうなるのか。内村鑑三の厳しさについて行けず、信仰を離れた正宗白鳥などがその一人ではありますが、それだけではありません。幸田露伴の娘である幸田文は富士見町教会で洗礼を受けたクリスチャンでもあ

りましたが、ミッションスクール育ちでクリスチャンでもあった義理の母との折り合いが悪く、やがて教会を離れ、亡くなった時には、露伴と同じ池上本門寺に埋葬されることとなりました。このように自ら見切りを付けた人も大勢いたわけですが、その場合、折角芽が出て大きくなったその苗木を茨で覆ってしまったのは誰なのか。それは、世間でもなく、また、キリスト教信仰に批判的な人たちでもない、クリスチャンたる内村鑑三であり、また幸田文の義理の母でもある、ただ、そこで考えるべきことは、私たちはそれを他山の石とすることができるのかということです。

そこで、この現実を直視する際に私たちがよく用いる言葉が「罪人」というこの言葉です。それは、事実その通りであり、罪人としてのこの現実が根を枯らせ、また、成長の可能性すら奪うことにもなるからです。ただ、そうなると、コリント教会がこの世の役割を終えることになったのは、罪人としての現実ゆえのことだということでしょうか。それだけではありません。様々な場面で良くコリントの教会が引き合いに出されることが多いのですが、では、この罪人としての現実に苦しむだけなのが私たちキリスト教会なののでしょうか。これについては、私たちの多くは様々思い当たるところがあるのですが、しかし、それにも関わらず、神様の赦しと救いを語ってきたのが私たちキリスト教会でもありました。そして、それが今日まで続けられることになったのは、その語る言葉に多くの人々が希望を感じたからです。そして、多くの人々が福音に希望を託すことができたのは、教会の語る福音に誤魔化しがなく、嘘偽りのないものであると、多くの人々がそう信じたからです。そこで皆さんにお尋ねしたいのですが、では、この信じるということについて、皆さんはどんなイメージをお持ちでしょうか。良い土地と悪い土地とを比べれば、どちらがいいかは一目瞭然です。では、その蒔かれた福音のタネは、良い土地に落ちたものなののでしょうか、それとも悪い土地に落ちたものなののでしょうか。

若い頃とは違って、年を重ねるということは、それだけ「現実」を見つめてきたということです。そして、この「現実」を見つめるということは、同時に、多くのものに私たちが疑いを抱くようになったということです。つまり、信仰生活を続けるということは、聖書の御言葉にも、教会にも、

仲間にも、あらゆるものを疑うようになる、信じたい、信じなければ、とそう思っていたものがまったく正反対の姿に見えてくるということです。このように、信頼ではなく疑いや不信感が心の大半を占めることになるのが私たちの信仰でもあるのですが、ですから、このイエス様の譬え話は、神の国の到来の喜びを語ると同時に、疑いや不信を募らせ、信仰的に成長できずにいる私たち自身を語っているとも言えるのでしょう。しかし、どうでしょう。かつてのようにだから努力せねば、頑張らなければと自らを叱咤激励し、その信仰心を奮い立たせることもできずにいるのが私たちなのではないでしょうか。それは、もう十分にそうしてきたからです。しかし、それでも私たちが諦めずにこうして日曜日の度毎に礼拝に集まっているのはどうしてなのでしょう。それは、惰性によるものなのか、それとも、ある種の諦めによるものなのか。あるいは、そもそものところで、私たち自身が良い土地に落ちたタネだからなのでしょう。結論から申せば、私はそうだと思います。主の日から主の日へと導かれ、この生活を大事にしている私たちが悪い土地に落ちたタネであるはずはないからです。しかし、ここが肝心なところでもあるのですが、にもかかわらず、その私たちは、自らに対しても、また、こうして与えられている自らの信仰に対しても、自信が持てずにいる、それはどうしてなのでしょう。

その原因の一つが今申しました疑いや不信感です。別の言い方をすれば、私たちが聖書的でもなく、また信仰的でもなく、ましてや教会的でもないから、少なくとも、これらのことに自信をもって自分はそうだとは思えないからです。そして、私たちがそう思うのは私たちが信仰的にも教会的にも聖書的にもたくさんの経験を積んできたからです。つまり、若い頃とは違って現実を深く直視できるようになったから、私たちが疑念と不信感を募らせる原因は、この現実をよくよく理解するようになったからです。従って、この疑念と不信感を振り払うことが私たちの信仰的課題だとも言えるのでしょう。ところが、この現実がその信仰的成長の妨げとなっているのです。経済的事情、年齢的事情、組織的事情、社会的な事情、実に様々な現実が私たちを覆い、苦しめもするのです。疑念と不信はそれゆえのことでもありますが、それゆえ、

この苦境から一刻も早く逃れなければならない、逃れたい、そう思うのは人情だとも思います。けれども、この試みに成功した人は果たしてどれだけいるのでしょうか。試みに成功するというのは、現実に対して鈍感になることではありません。また、突き放すかのように冷たい視線を向けることでもありません。疑念と不信感を強めるしかないこの現実を心から喜べる、それ以外のものではないからです。

良い土地の対極あるもの、このそれぞれのもを良い土地に繋げてみると、それはどのようなものに見えてくるのでしょうか。この三つのパターンは、良い土地のかつての姿です。石コロを取り除き、覆う雑草を抜く作業、良い土地はその繰り返しの中で作り上げられるものだからです。つまり、一朝一夕に良い土地はできあがらないということです。けれども、私たちにはこの良い土地が与えられている、この良い土地に落ち、芽生え、育つことが許されている、それが私たちでもあるのです。それは、疑いと不信感を募らせるしかないという長い時間を経て与えられたものがこの譬え話を語る、良い土地であるイエス様であり、そして、このお方を通しこうして御言葉に聞いているのが私たちでもあるからです。ただし、そうであるからといって、私たちが単純にだから平安で満ち足りた毎日を、何の疑いも抱かず、何の不信感も抱かず、生活できるということではありません。暮らすということは、その喜びの大きさもさることながら、それ以前に、苦しいこと、辛いこと、切ないこと、泣きたくなること、死にたくなること、そういう苦しみや悲しみの方が、そこで感じる喜びよりももっともっと大きいものがあるからです。まただから、私たちはそうしたものを一つ一つしらみつぶしにしていかなければならない、そして、それが本当の信仰だとそう思い、考えたくもなるのでしょう。けれども、そういうことに地道を上げるしかないものを私たちは本当に心から喜ぶことができるのでしょうか。少なくとも私自身は、そういうものに囚われている自分自身がそこで喜びを感じることができるといって、そうは思えません。しかし、だから、神様とイエス様を信じるということに喜びを抱くことができないうと、そういうことではありません。

そこで、前回皆さんにお伝えしたことを思い出していただきたいのですが、それ

は、イエス様が形式主義も心情主義も嫌っておられるということでありました。今日の箇所は、その続きとして語られているものでもあります。その最後でイエス様の仰ったことが「誰でも、私の天の父の御心を行う人が、私の兄弟、姉妹、また母である」とのこのお言葉でありました。そして、この言葉の中に見るものが私たちの置かれた現実でもあります。ところが、私たちはこの現実の中から自らを見つめるのではなく、もう一つの私たちが現にこうして生きている現実の中から自らを見つめてしまうのです。いわゆる、現実主義と言われることでもあります。ここでイエス様が群衆と距離を置き、一線を引こうとしたのはそのためです。それは、この現実主義と言われるものを通し、私たちがイエス様のお言葉を聞き誤ることがあるからです。ですから、この種まきの譬えは、現実現実と言って憚らない私たちのそうした思い込みを打ち砕くために語られているとも言えるのですが、けれども、それは私たちを突き放すためではありません。最後のところで「耳のある者は聞きなさい」とイエス様が仰るように、私たちにはイエス様のお声をこうして聞くことのできる耳が与えられているからです。そして、そのイエス様の声を聞くことのできる場所に生きているのが、イエス様を通して神様を信じる私たちであるからです。イエス様は収穫の恵みについて、あるものは100倍、60倍、30倍と語るのはそのためです。

しかし、この数え方は私たちの物事の数え方からすればまったく正反対の数え方です。従って、そこで大切なことは私たちの御言葉の聞こえ方、聞き方ではなく、聞こえ方です。それは、イエス様が語るころとはまったく正反対の聞こえ方をしてしまうことがあるからです。そして、そう聞こえてしまうのは、私たちの聞き方が悪いからではありません。そう聞こえてしまうということです。それは、私たちが私たち人間の現実に傾きすぎているからでもあります。もっと言えば、人間の現実だけに立ってイエス様のお言葉を聞こうとするからです。しかし、それは至極ごもっともなことであり、それは、私たちが人間であって、犬や猫にはなれないのと同じだからです。それが私たちがこうして生きている世界でもあるからです。けれども、そこで一歩、私たちがイエス様に近づいた時、そこにはイエス様のお言葉がまったく違う聞こ

え方をする場所が備えられているのです。悲しみが慰められ、癒やされるのはそのためです。イエス様が私たちに一歩近づくだけでなく、私たちもまた一歩イエス様にその時近づこうとするから、まただから、この世のものとしての役割、その命が終わったとしても、互いに一歩前に踏み出すイエス様との関係性に生きている私たちは、その時、終わりを終わりとして受け止めながらも、尚、慰めと励ましを受け、希望をもって新しい歩みへと導かれることになるのです。そして、それは、この日もそうです。

一巡りの歩みが終わり、新たなる歩みへと導かれているのがこの日の私たちであります。この恵みはこの日一日で終わるものではありません。日々新たにされるものであり、この新しさの中で日々過ごすのがこうしてイエス様と共にある私たちでもあるのです。ただ、私たちの置かれている現実の厳しさが私たちの気持ちをそのイエス様より遠ざけることがあるのです。信仰を精神主義のように捉えてしまうのはそれゆえのことでもあります。けれども、その時、私たちが心を静め、疑いと不信感によって逆巻くその気持ちをイエス様に向けるなら、その時、私たちはどんなイエス様の声を聞くことになるのでしょうか。

この日、礼拝後に私たちはコロナ後にあつてということ懇談会を持つのですが、それぞれに与えられているテーマは私たちの置かれているそのままの現実を現すものでもあるのでしょうか。けれども、私たちは一人ぽつんと現実を見つめてはいないので、イエス様と共にある現実を生きているのであり、イエス様が共にいます場所が私たちの生きる場所でもあるのです。まただから、私たちはイエス様の声を聞くのです。そして、その声は、私たちの聞かねばというところから聞こえてくるものではありません。自ずと聞こえてくる、イエス様はそういう場所に私たちを招き、そして、このイエス様の声そのまますぐ聞こえる場所で神の国を迎えるのが私たちでもあるのです。そのことをもう一度しっかりと心に留め、新たな一巡りの歩みへと進み行く私たちでありたいと思います。祈りましょう。